様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 １８ 日現在

機関番号：４３８０７
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2018
課題番号：１５Ｋ０１７８８

研究課題名（和文）ホスピタル・プレイから導くハイリスク児を対象にした遊育理論確立のための調査研究

研究課題名（英文）To give Hospital Play a Japanese name Yuuiku, is on its academic process.

研究代表者
松平　千佳（Matsudaira, Chika）

静岡県立大学短期大学部・短期大学部・准教授

研究者番号：７０３１０９０１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,500,000円

研究成果の概要（和文）：ホスピタル・プレイに「遊育」という和名をつける為の研究の道のりは、この4年間の研究を通して着実に進んだと考える。その理由として、次の3点を挙げる。1.病院だけでなく、地域で働くHPSや療育施設で働くHPSの数が増えてきた事。2.特別支援学校やリハビリテーションにかかわる専門家等との協働場面が増えている事。3.遊びの持つ「育てる力」に着目した事例発表が増えている事等である。このような傾向を作り出す基盤としての研究活動は、他の領域の専門家と話し合うプラットフォーム形成を可能にしていると考える。専門多職種の連携は、医療ケアを受ける子どもたちにとって必要不可欠であり、本研究は連携づくりに貢献している。

研究成果の学術的意義や社会的意義
この４年間の研究をとおして、ホスピタル・プレイを「遊育」という和名に変えていくプロセスは明確になってきたと考える。なぜなら、より多くの専門領域で働く子どもにかかわる者がホスピタル・プレイに興味関心を持ってきたこと、また、特別支援学校の先生やリハビリテーションにかかわる人たちとのコラボレーションが増えたこと、また、遊びの持つ子どもを育てる力により多くの専門家が着目していることから、分かる。

研究成果の概要（英文）：To give Hospital Play a Japanese name Yuuiku, is on its academic process.
By this fours years more child care professionals are interested in studying Hospital Play, more different professionals such as teachers,
Physios, are seeking for corporation, and more academics are interested in the power of Play. By the four years of grant, it is obvious that the platform for multidisciplinary team making has become visual. Making a strong bond between all professionals is the only way to support the wellbeing of the sick child.

研究分野：Hospital　Playに関する分野

キーワード：社会福祉　医療・福祉　ホスピタル・プレイ　遊育　ハイリスクな子どもたち

１．研究開始当初の背景

ホスピタル・プレイにかかわる研究及び、ホスピタル・プレイ・スペシャリストの養成教育は大変順調に進むなかで、医療的ケアを必要とする子どもたちのニーズが複雑で多様であることに気がついていく段階にあった。また他職種連携ということばは叫ばれるものの、具体的な連携のありかたについて臨床的に証明されるものは少ない段階であった。

２．研究の目的

本研究は、これまで蓄積してきたホスピタル・プレイにかんする研究を基盤に、教育実践を踏まえ、病児のみならず、被虐待児や医療的ケアを必要とする在宅重症心身障がい児等、ハイリスクな子どもたちに対し、遊びを用いた新たな支援方法を国内外の先進事例を取り入れながら、「遊育」ということばで融合していこうという試みである。

３．研究の方法

HPS が支援することが難しいと感じる自閉スペクトラムの子どもたちに特化した支援方法を教育できる海外講師などを招へいし、先進事例を HPS に教育プログラムとして提供し、先進事例を学んだ日本の HPS が、日本の子どもたちに実際の支援をおこない、そのフィードバックを分析し効果を確認する方法。

４．研究成果

この４年間の研究をとおして、ホスピタル・プレイを「遊育」という和名に変えていくプロセスは明確になってきたと考える。なぜなら、より多くの専門領域で働く子どもにかかわる者がホスピタル・プレイに興味関心を持ってきたこと、また、特別支援学校の先生やリハビリテーションにかかわる人たちとのコラボレーションが増えたこと、また、遊びの持つ子どもを育てる力により多くの専門家が着目していることから、分かる。その理由として、次の 3 点を挙げる。１．病院だけでなく、地域で働く HPS や療育施設で働く HPS の数が増えていったこと。２．特別支援学校や、リハビリテーションにかかわる専門家などとの協働場面が増えていること。３．遊びの持つ「育てる力」に着目した事例発表が増えていることなどである。このような傾向を作り出す基盤としての研究活動は、他の領域の専門家と話し合うプラットフォーム形成を可能にしていると考える。専門多職種の連携は、医療ケアを受ける子どもたちにとって必要不可欠であり、本研究は連携づくりに貢献している。

報告書では、報告者がかかわってきたこの４年間の HPS 養成教育の推移をデーターで示すとともに、その成果を発表するための海外学会における反応、およびホスピタル・プレイを発展させるための考察について述べる。

1）HPS 養成教育の推移

2007 年に静岡県立大学短期大学部において社会人を対象としたホスピタル・プレイ・スペシャリスト（以下 HPS）の養成教育が始まり、有資格者が在籍する医療機関等でホスピタル・プレイ（以下 HP）が導入されている。HPS は遊びを用いて子どもの治療体験の肯定化を図る専門職であり、医療チームの一員として様々な診療科で子どもの支援に従事している。〔1〕

これまでの研究も、今回報告する研究もすべては HPS 養成教育を社会人を対象に始めたことから派生するものである。養成教育を経た日本生まれの HPS の臨床的な活動と報告をとおして、日本の小児医療の課題がより明らかになっていく中で、再びどのような教育内容が必要なのか、あるいはどのような体制が必要なのか考えることにつながっている。近年の傾向として顕著なことは、HPS の教育を受けたいと願う人たちの属性の多様化である。以下の図１に示す通り、

子どものケアにかかわる保育士と看護師が最も多いカテゴリーだが、徐々にその他の分類が多彩になってきていることが分かる。

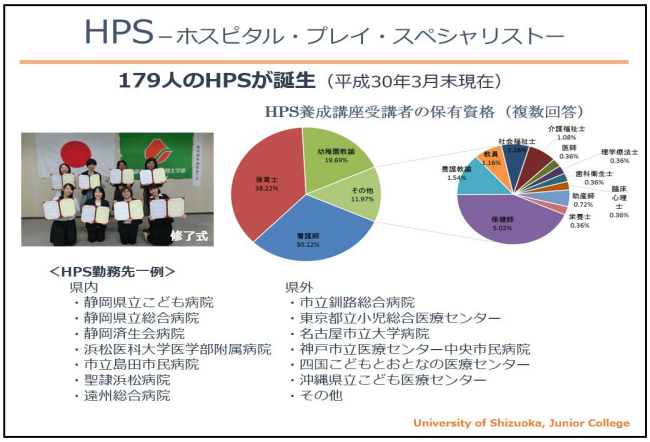

図１　HPS 養成講座受講者の保有資格（複数回答）

また、以下の図は都道府県別の図２である。HPS のトレーニングは時間数も多いため負荷の高い教育プログラムだが、遠くても必要性を感じ受講を希望する者が多いことが分かる。つまりは、それだけホスピタル・プレイの需要があるという事、またハイリスクな子どもたちが多く存在するという証明に他ならない。

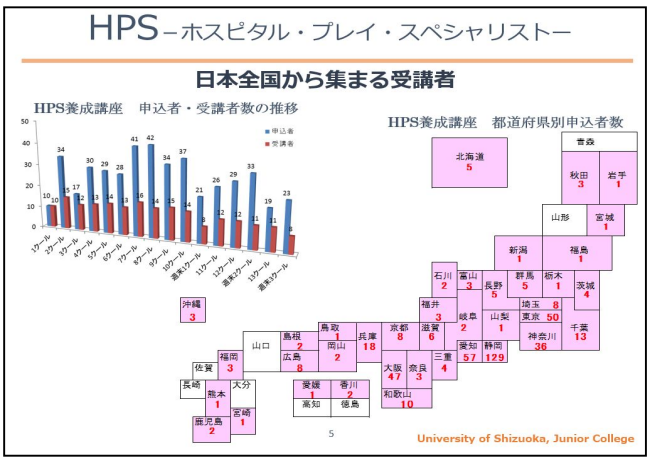

図２　日本全国から集まる受講者

2）海外調査

４年間で、先進事例を調査した。ロンドン郊外にある The Children’s Trust はもともとはグレートオーモンドストリート病院の付属中間施設だった。現在は、脳に損傷のある子どもたちが退院後入所し、リハビリなどのトレーニングを受け、在宅に向かうための準備をおこなう施設である。人工呼吸器をつけているお子さんや、脳しゅようの摘出をしたお子さん、また重度の脳性まひや、交通事故など、とにかく重複した障害を負った子どもたちが入所あるいは通所しているところであった。広く緑あふれる敷地に、最新の設備を整えたリハビリテーションセンターと、居住棟が整っていた。また学校も併設され、大学入学に向けての勉強に励んでいる子どももいた。ここで最も印象に残ったのが、子どものリハビリを担当する OT や PT である。彼女たちは「24 時間リハビリ」という考えのもと、リハ室の中だけリハビリをするのではなく、生活に密着した目的をたて、こどもの QOL を高めようという考えを持っていた。例えば、脊髄を損傷し、そのうえ足を切断した 13 歳の子どもの目標は「バクテンを打てるようになること」だった。できないと決めつけるのではなく、子どもの願いに沿って 24 時間の生活の中におけるリハビリを考え、提案すると PT は言っていた。ここでの研修をとおして多職種連携の必要性を改めて確認することとなった。また、ハイリスクな子どもとして発達障害児をあげた中で、英国から特別支援教育の専門家を招聘し、複数回ワークショップを開催することが出来た。それぞれの子どもに特化したコミュニケーション方法を、複数用意することの必要性を広めること

が出来たのではないかと考える。

3）研究発表

４年間の研究成果は、国際学会などにおいて発表をおこなった。

①OMEP は、７０年前にプラハで第１回の総会を開催した８歳以下の子どもの教育と福祉を考える国際団体である。７０年前、第２次世界大戦が終了しヨーロッパ全土が荒れ果てた状態にあった中で、未来の平和を作るのは子どもたちだという強い信念を持つ各国の有志が集まり現在まで続いている国際組織である。HPS とのかかわりだが、実は英国の HPS の誕生を可能にしたのは、OMEPUK の代表を１９６０年代に務めた Susan Harvey だった。彼女は、「遊びを奪われた子どもたちは、人生の喜びと意味を見いだすことのできない囚人である」と書き残したことからも分かるとおり、OMEP が病児にも目を向けることを推奨した。そのため、日本で HPS にかかわる活動が小さくでも何かを成し遂げたときには、OMEP の国際大会に行って発表しようと考えていた。たまたまであったが、今年度は７０年前の第１回大会が開催されたプラハに戻って７０回の記念大会が開催される運びであった。

私の口頭発表は木曜日に行われた。国際色豊かなメンバーと聴衆の中で、「皆さんは子どもというとどのような子どもをイメージしているのでしょうか。このような子どもたちの存在を忘れていませんか？」という質問と医療的ケア児の写真を見せるところから研究発表を始めた。決して数の理論から言うと、少数派であるこれら医療的ケア児の存在だが、彼らを医療が生かしたのであるならば、「生まれてきてよかった」と思えるよう支援することは我々大人の責任なのではないかと、投げかけた。反響は大きかったようである。また、カナダの研究者、英国の研究者などとつながりを作ったので、協働していきたい。

②2018 年には、ニュージーランドの HPS 協会が主催する、第 9 回 Biennial International Conference において研究発表をおこなった。ニュージーランドの HPS は、2 年に一回学会を開催しており、私自身は今回で 3 回目となる研究発表であった。今回は、日本の伝統文化であるカルタを用いたプレパレーションの取り組みと、HPS が開発したカードゲームにかんする研究発表をおこなった。研究発表は大変盛況で、終わった後もたくさんの質問を受けた。印象深かったことは、スターライトというニュージーランドでは最も大きな子ども病院の HPS が、「私たちは寄付も多く、玩具などの材料には恵まれているが、逆にその豊かさが、HPS が本来もっている創造する力を弱めてしまっているのではないかと感じた。原点に戻ったようで、ありがたい」と感想を述べたことである。日本の HPS の場合、まだ何も無いからこそ作り出すという姿勢と努力が強みだと改めて感じた。先日送られてきた評価表にも、「もっと取り組みについて知りたい」「時間が足りなかった」「遊びを用いたプレパレーションの力が伝わった」などのフィードバックをもらっている。ニュージーランド HPS 協会とは、アジアの国を対象にした学会を開催してはどうかと言う話し合いをおこなった。４年間の研究が国際的なつながりの強化に貢献したと考える。

＜引用文献＞

〔1〕加藤恵美、静岡県立大学短期大学部　研究紀要 32-W号（2018 年）pp1

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 3 件）

①松平千佳、子どもが喜ぶ！ディストラクションツールの作り方と使い方　治療に対する病児の主体的なかかわりを促すホスピタル・プレイの技術-ディストラクション/単著/査読有
こどもケア 9(6) ,pp47-pp49/2015

②松平千佳、中山陽子、服部清、平成 26 年度静生市参位第 6 回パイロット事業「障がい児・者に対するやさしい歯科治療を実現させるための共同事業」/共著/査毒有　静岡市役所　市民

自治推進課　/2015
③松平千佳、The progress of Hospital Play in Japan/単著/EACH Conference 2016/2016

〔学会発表〕（計 22 件）
①松平千佳、Hospital play in Japan. now and the future、CLC34th ANNUAL CONFERENCE ON PROFFESSIONAL ISSUES（国際学会）、 Walt Disney World Swan and Dolphin Hotel、2016.5.19-22 アメリカ

②松平千佳、The progress of Hospital Play in Japan、European Association for Children in Hospital 13th Conference Zeist 2016.9.21-23　ニュージーランド

③松平千佳、Therapeutic　power of Card Games developed for Play Preparation based on Japanese traditional card game,KARUTA、９th Biennial International Conference（HPS 国際大会）,2018.4.13-14　ニュージーランド

④松平千佳、The Need and Meaning of Play for Children with Complex Medical Needs、OMEP 2018 70th OMEOP World Assembly and Conferende　Prague,　Czech Pepublic、2018.6.27-28 チェコ

⑤松平千佳、日本におけるホスピタル・プレイ養成の取り組み、IMAGINE Building Emotionally Safe Spaces　Join our movement for children. Inspire change a day of dialogue、2018.10.26 インド
〔図書〕（計 0 件）
〔産業財産権〕
○出願状況（計 0 件）
名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：
○取得状況（計 1 件）
名称：メディカルかるた
発明者：松平千佳
権利者：NPO 法人ホスピタル・プレイ協会　すべての子どもの遊びと支援を考える会
種類：商標登録
番号：登録第 5872909 号
取得年：平成 28 年
国内外の別： 国内

〔その他〕
ホームページ等
HPS Japan
http://bambi.u-shizuoka-ken.ac.jp/hps_site/index.html
NPO 法人ホスピタル・プレイ協会　すべての子どもの遊びと支援を考える会
http://hps-japan.net/
６．研究組織
(1)研究分担者
研究分担者氏名：加藤　恵美

ローマ字氏名：KATO,Emi

所属研究機関名：静岡県立大学短期大学部

部局名：社会福祉学科

職名：短期大学部　助教

研究者番号（8 桁）：50381314
(2)研究協力者
研究協力者氏名：
ローマ字氏名：
※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。